



山梨県障害者差別解消支援ネットワーク会議

【トピック】

- 「お互いさま」の意識について考えます。
- 「思いやり」から「お互いさま」へ
- 障害の有無ではなく、ひとり人間としての、個としての存在へ

事務局：山梨県障害福祉課
〒400-8501
山梨県甲府市丸の内1-6-1
Tel 055-223-1460 Fax 055-223-1464
E-mail shogai-fks@pref.yamanashi.lg.jp

意識の変革は、時代の流れとともに様々な場面で求められてきたことです。

昨年4月の障害者差別解消法施行以来、障害は社会の様々な障壁がつくり出しているという「社会モデル」の考え方が示され、障害のとらえ方の変革が求められています。また、社会的障壁のひとつとしてあげられる「慣行」は、障害のある方を意識していない習慣や文化を含みます。差別はいけないと意識してはいても、これまでの慣行として気づかないで済ませてしまっていることもあるのではないでし

ょうか。これと同様なことは、障害の有無に関わらず、生活する様々な場面で多くの人が経験し、こうすれば便利なのにと感じることもあるのではないかと思います。これまでの世の中の仕組みを、「誰でもいつかはありえること」という視点で社会的障壁を除いていくことが求められています。

「思いやり」「理解する」などの意識や仕組みから、「誰でもありえること」として、「お互いさま」のこととして考えることができる社会構造への変革が必要ではないかと考えます。

「思いやり」から「お互いさま」の意識へ

他者との関わりの中で、「思いやり」の心を持ちたいと願うのは、どなたも同じだと思います。しかしながら、複雑な社会構造や周囲の人との関わりに傷み、生活や心にゆとりが少なくなってしまうようなときもあり、その思いを發揮することが難しい場面もあるのではないのでしょうか。

生きづらさや働きづらさを感じる日々の中では、共に暮らしていく社会、共生社会をつくらうとすることはなかなか容易なことではないと考えてしまう時もあります。

しかし、人は一人では生きてはいない、いろいろな人の手が関わって今の自分があることを体験的に知ると、他者への関わりを考え直すときがあるのではと思います。

人のライフステージには子供から青年、おとな、そして高齢者という誰もがたどる連続した共通の道筋があります。この道筋の上では、様々な人との関わりがあり、そこには、助けたり、助けられたりの関係が「お互いさま」の関係として必ずあるように思えます。

以前には、さほど意識することなく「お互いさま」が様々な場や関係において、当たり前のこととして形作られていたように思います。しかし、様々な複雑化し、個の世界が幅を利かせる世の中となり、「お互いさま」の意識は当たり前のことではなくなっているようにも感じます。

共生社会づくりを考えるとき、この「お互いさま」を社会的な意識、仕組みとしてつくることが求められているのではないかと考えています。「お互いさま」の理解のために、ひとりの暮らしは様々な人に支えられ、助けられていることを知る機会をつくる必要があります。この取組を考えると学校の学校教育、社会教育の役割は大きく、期待されることが多くあります。

障害のある方との関わりで考えれば、直接関わることで気づくことが多いことは確かです。出会いと気づきの機会、お互いを意識する機会を意図的につくっていくことが求められているのではないかと考えます。日常生活の中でも、障害のある方たちと共に生活していることを意識できる、自覚できるような仕組み、環境整備が必要です。

前号までに紹介した障害のある方々の声にある、車いす使用の方や視覚障害の方の「障害者は積極的に街へ出るべきだ」「障害者が、珍しい存在でなくなるのがよいと考えている」という思いを大切に、協同してことにあたることで、共生社会づくりには求められることだと思えます。

お互いさまの意識と心のバリアフリー

ひとりの人間、個として向かい合うことの大切さを、人との関わりの基本と考えたいと思います。「理解する」「してあげる」という関わりではなく、障害の有無に関わらず、すべての人が様々な関わり合いながら、「お互いさま」の意識で生活できる社会をつくるのが、心のバリアフリー、共生社会の実現を目指すことにつながっていくのではないかと感じています。

互いの生きる姿勢から学び合い、どちらも助ける側にも助けられる側にもなることが広く社会に浸透すれば、障害があるとかないとかは、意味を持たないことになるのではないのでしょうか。すべてのことをお互いさまと思うことができるようになることが、共生社会の実現に近づく道ではないかと考えます。

山梨アール・ブリュット合同企画展



「呼吸(いき)をするように生まれたものたち」と題して、山梨アール・ブリュット合同企画展(以下企画展[注1])が韮崎市民交流センターニコリで、1月21日から27日にかけて開催されました。企画展のパンフレットを許可を得て掲載します。作家の皆さんの「呼吸(いき)」の一部を感じていただけませんか。

アール・ブリュット(Art Brut)とは、「正規の美術教育を受けていない人による、何ものにもとらわれない表現」で、「自然に湧き出てくる衝動を基に、独自につくり続けられている芸術を指す」とされています。

この企画展で、主催者は展示された作品を「なにげなく過ぎていく日常の中で、ごく自然に、まるで『呼吸(いき)をするように』生み出されていくアート」と紹介し、展示について「県内在住の作家について、その多様な作風とともに…(中略)…各作家の創作の源流に迫る」と案内しています。

また、企画展の案内パンフレットでは、展示作品について「彼らの作品は、純粹で素直な喜びや悲しみ、感動や切なさであふれ」ており、「それは彼らが辿った足跡であり、彼らが生きてきた証そのもの」と説明し、参観者には「皆様には感性のまま、それを受け止めていただけたら」と訴えています。

この企画展に関する新聞などの紹介のなかで、「障害者による作品の展示」のように表現されるのを見聞きしました。前述したとおり、アール・ブリュットは「正規の美術教育を受けていない人による」芸術であり、作家の障害の有無という視点ではなく、ひとりの作家が生み出す作品の芸術性に関心が集まり評価されることが大切で、求められることではないかと考えます。

障害のある作家の作品という先入観なしに、ひとりの人間の作品を鑑賞するという意識が必要ではないかと感じます。作家の皆さんは、独自の発想と方法で制作した作品で自分の心をありのままに表現しています。

アール・ブリュットは当初「アウトサイダー・アート」と英訳され、民族芸術も含んだ幅広い捉

えで世界に広がったと言われています。アール・ブリュット提唱のもととなった多くの作品を残したスイスの芸術家アドルフ・ヴェルフリの国内初の個展について伝える記事が、2月16日付の読売新聞に掲載されました。記事の中で、「アウトサイダー・アートに詳しい精神科医」斎藤環氏の言葉として紹介されている「アウトサイダー・アートには、偏見のない理想社会への橋渡しという役割もある。アウトとインの境界は暫定的なものであり、優れたアートにはアウトもインも存在しない」という作品重視の姿勢が印象的です。

「これはよいなあ」と感じる作品に巡り合える楽しい機会として、アール・ブリュットに関する絵画展に足を運びたいと考えています。企画展の再度の開催に期待しています。

視覚障害の方と歩く

通勤のため、JR中央線を石和温泉駅から甲府駅間で利用しています。この通勤の際に、週2日、やはり同区間を利用される視覚障害のある方と一緒に歩きます。

最初に声をかけるときは、一瞬の戸惑いがありました。ホーム上で、「おはようございます」「私は〇〇と申しますが」「甲府駅まで乗りますが、よろしかったら一緒に歩きますが、いかがですか」と声をかけたところ、「お願いします」の返事があり、肩に触れていただきました。その時から一か月余り一緒に通勤しています。お話をしているうちに、かつて私が盲学校に勤務したときに中学部に在籍していた方と分かり、以来、ご一緒するたびに様々なことをお話しします。街を歩く際の不便さなどもお尋ねしますが、

工事中の箇所の歩きにくさも、一緒に歩くことで実感できます。また、石和温泉、甲府両駅の駅員の皆さんの視覚障害者への対応は大変良いとの印象も聞きましたが、実際、この方が改札を通ったかの確認や介助依頼への対応、両駅間の連絡と降車駅での駅員待機など注意を向けていただいている様子と配慮を確認することができます。

毎回、短い時間ですが、私にとっては、様々な学ぶことのできる大切な時間となっています。また、ご一緒しながら、「お互いさま」の関係を改めて実感しています。

解説

[注1]山梨アール・ブリュット合同企画展：社会福祉法人「ハケ岳名水会」と「山梨アールブリュットネットワークセンター(以下センター)」が主催し開催。事務局は、「ハケ岳名水会」企画事業部内に置かれている。なお、センターは、ホームページで「私たちの役割」として、「アール・ブリュットと呼

ばれる創造性の源泉からほとばしる真に自発的な表現をしている人、また、その家族を応援し「作家の心のあり方や魂の叫び、無意識から生まれる多種多様な表現はとても興味深い表現活動である」とセンターの活動とともに、作家たちの活動を紹介している。

文責：古屋徳康(県障害者差別解消推進員)